# 浸透世界のデリット

夕闇終夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

浸透世界のデリット

【Ｎコード】

Ｎ８８２６Ｙ

【作者名】

夕闇終夜

【あらすじ】

世界はエルドの大樹によって支えられ、魔物が徘徊していた。エルドの大樹によって育てられた少年、アルト・クラッシェード。彼は《勇者の末裔》、《魔王》、《魔族》、《人間》と出会い、『呪われた右目』で一体何を見、何を感じるのか――――。数千年前の勇者と魔王、そして魔術師の戦い、そして《現在》――――イマ。何が起ころうとしているのか。

# 「プロローグ」

「・・・」

エルドと呼ばれる大樹の側。
ソコに、1人の少年が座り込んでいた。
エルドはその少年を見る。
エルド、と呼ばれる樹は代々世界中から崇められる世界樹だ。
この世にたった一本しかない、世界を支える樹。
そして全ての精霊を司る象徴でもあり、別名、『精霊王エルド』と呼ばれている。
エルドは人間達を護る精霊だ。
人間を何年も見ている。
そして、その少年は左目が青いのに対し、右目の色は、血の様な真紅だった。
エルドは瞬時に理解する。少年は人間の国を追放されたのだと。
何故、理解したのかは記憶を詠んだりなんだりして判った事だが・・・。
一番の理由は、その赤い右目が関与していた。
きっと、その右目が原因で追放されたのだろう。
少年は、人間の年齢にして6歳程度だろう。きっと、自分が置かれている状況も判らないだろう。
少年は無表情のまま、エルドを見上げた。
悲しそうに表情を歪ませる。
エルドは人間の姿になる。
本体は勿論、樹だが。
エルドは少しだけ微笑んで、少年に言う。

「君の名は？」

「・・・アルト。アルト・クレッシェード」
「おいで。僕がキミを護ろう。アルト・クレッシェード君。僕の名は、エルド。よろしくね」
エルドは出来るだけ優しい微笑を少年に。
少年は無表情のまま、エルドを見上げる。

◆

「アルト。おはよう」
「・・・朝っぱらから人間になってんじゃねぇよ・・・。魔力とか、最近失ってきてんだろうが・・・」
半分寝ぼけながら、黒髪の少年は答えた。
森の奥深く。
エルドと呼ばれる大樹の直ぐ側。
木造で出来た小屋に、１人の少年が住んでいた。
少年の名は、アルト・クレッシェード。
エルドの森で暮らす者で、年齢は１６だ。
アルトはベッドから起き上がって、あくびをしながら手洗い場までフラフラと歩いていく。
蛇口をひねると肌には調度いいと思う程度の冷水が流れ出た。
「・・・フワァ・・・」
大きくあくびをして、アルトは顔を洗うと台所まで歩いた。

「エルド。何か食べたい物とかあるか？」
「・・・僕は精霊なんだけどねぇ」

エルドと呼ばれた緑色の髪にエメラルド・グリーンの瞳をした青年は、苦笑しながら木製の椅子に座っていた。
青年はエルドと呼ばれた世界樹の人間の姿である。

「じゃあ、パンとコーヒーを貰おうかな」
「本当にそんなんで満足なのかよ・・・」
「僕は精霊だよ？本当は何も食べなくても生きていけれるんだ」

エルドのそんな言い分を無視したアルトは、彼の前に食パンとコーヒーカップを置く。
コーヒーカップからは湯気が出ていた。
エルドは手を合わせ、「いただきます」と言うと食パンを少しだけかじる。
アルトも向かい側に座ると自分の分のパンをかじった。

「そういえば。魔術の勉強は進んでる？」
「まーな。大体の事は習得できたつもりだけど」
「そっか」

コイツと喋っている時、唐突に会話が途切れる事がある。
アルトは溜息を吐いて、エルドの顔をうかがった。
本人は魔力を失いつつあり、大分身体も衰退と衰弱を始めていると言っていたが、とてもそんな風には思えないほど普段と変わらない表情をしている。

「剣の修行もしないといけねぇなぁ。最近、魔物が増えてきてるら

しいし。・・・っつぅか、いつまで人間の姿になってんだよ。お前今、魔力の使いすぎって寿命を縮ませる行為にも等しいんだろ」
「・・・まぁね」
「・・・だったら早く本体に戻れよ」
「そうだね。・・・心配してくれてるの？」
「なわけねぇだろ」

フイッと顔を背けるとエルドはクスクスと笑った。

◆

「・・・最近、魔物が多くなってきているな」
「・・・魔王の出現、も、大きく関係しているんでしょうね」

フレイア王国、フレイア王宮内。
貴族の様な服装をした長身の男がもう1人の、一見どこかの戦士の様な姿の女性と廊下を歩きながら会話する。

「・・・全く、迷惑極まりないな。魔王なんつぅのは」
「全くです」
「そういやぁ、アイツはどうした？えーっと、なんつったか・・・」
「あぁ、あの《勇者》の血筋を受け継いだ・・・」
「そうだ。近々、エルドの樹を訪れるそうだ・・・。だが最近、エルド周辺は魔物が手ごわく多いらしいから誰も近づけないんだがな」
「・・・何をしにいくんでしょうね。あんな、魔物が居るだけの森に」

男は少し考えるそぶりをし、たった一つの仮説を見出す。

「もしかしたら、エルドの加護、かもしれんな」
「エルドの加護、ですか」
「あぁ。・・・まぁ、『精霊王エルド』の加護は、不可欠になってくるだろうしな」
「・・・噂をすれば」

女性は後ろを振り向き、背後に立っていた青い髪に青い眼の若い優男を見て微笑んだ。

「エルドの森に、何しに行く気なの？」
「・・・さっきそこの男が言ったとおりだ。・・・『精霊王エルド』との契約、及び加護を受けに行く」

そういうと男は女性の隣を通り過ぎていった。

## 1－1　「精霊王エルドの樹」

エルドの樹。

別名は『精霊王エルド』。

全ての精霊達を守り、世界を支える大樹だと言われ、加護を受けたものは唯一、エルドの側に行く事を許される。
ただ、例外が居るとすれば。
それはエルドに育てられた者だけだろう。

◆

「・・・？」

胸がざわつく感覚を感じ、エルドは顔を上げる。
それは小屋でアルトの魔術の勉強をしていた時だった。
この感覚は、誰かが、森の中に入ってきた・・・？
人間みたいだけど・・・相当な魔力の持ち主だ・・・。

「アルト。森の中に誰かが・・・」
「・・・どんな奴かわかるか？」
「相当な魔力の持ち主だよ。魔族じゃないみたいだけど。うーん・・・。なんていえばいいんだろう」
「お前が曖昧な言葉を返すなんて珍しいな・・・。見てくるよ。どうせ本体にも会いに行こうとか思ってたし」

「じゃあ、頼むよ」

アルトは小屋を後にし、エルドは少しだけ微笑む。――――エルドはうすうす感じていた。
あの魔力の持ち主が、一体何者なのかを。
きっとその魔力の持ち主が、アルト・クレッシェードという忌み嫌われる右目を持つ者の運命を深く変えてしまうことさえも。
それは、きっと悪くも、良くも。
エルドは本体に戻るために、魔力を戻した。

◆

「・・・ッハァァ・・・」

まだ早朝のせいか、空気が肌寒いくらいだった。
身震いし、息が白く吐かれている。

（厚着にマントを羽織っててもうこんなに寒いのか。・・・太陽は当たっているようだけど、こうも寒いと、そら弱るわな）

白い息を吐きながら、森の中を進んでゆく。
すると奥に進めば進むほど何かの光が強くなっていった。
ザワザワと、耳元で何かの音が鳴る。
精霊たちが、アルトが森の中へ入ってくるのを楽しみにしていたように空気が振動し、その感情がアルトの中へ伝わってきた。

少し、ピリピリした空気を感じる・・・？
それにしても・・・誰だよ、こんな寒い日に森の中へはいって来る奴は。
エルドの魔力も弱っちまってるし。できるなら無理しないで欲しいんだけど。
そこまで考えてアルトは一度止まる。
・・・俺、エルドの事、心配してんのか・・・？
まぁ、エルドは俺の育て親だし。心配しない方が可笑しいんだけど。
・・・何だか今日は調子が狂うな・・・。
するとフワフワと赤い粒子が舞い始めた。
少しずつ体温が高まっていく。どうやら火の精霊が温度を上げてくれているらしい。
これならエルドも少しは魔力を温存できるだろうな。

・・・まただ。エルドの事、心配しすぎなんじゃねぇか？仮にもアイツは精霊王なんだ・・・――――。

――――ザワッァア

「・・・エルド」

顔を上げると、エルドと呼ばれる精霊の大樹が光子を纏っていた。
光合成でも・・・いや、世界樹だと言うほどなのだから、魔力を補充でもしているのだろうか。
アルトはエルドの幹に手を添えた。
眼を瞑り、魔力を集中させる。

「・・・――――――」

呪文の様な何かを呟くと、エルドは風もないのに葉を揺らした。

（これで魔力の足しになればいいんだけど。俺だけの魔力じゃ足りないだろうな）

本人曰く、相当衰弱しているのだというらしいし。
・・・全く、そんな衰弱しているなら俺の前で人の姿をしなくてもいいのに。

――――ガサッ・・・

「！！・・・誰だ」

音の鳴った方向へ、魔力を集中させる。
木の背後から現れたのは、長身の青い髪をした男だった。
腰には剣が携えられている。
驚いたようにこちらを見て、再び一歩、前に歩んだ。

「・・・誰だと聞いてるんだが」
「・・・俺は、《勇者》の血を受け継いだ者だ。・・・お前、エルドに近づけるのか？」

アルトは「は？」という顔になる。近付くくらいでどうなるのだ。
・・・でも、前にエルドは自分のみを護るために見知らぬ者は入れぬようにしているとか言ってたような。

（というか、今、コイツは《勇者》とか言ったか？）

男をジッと見て、魔族ではないのを改めて確認した。
ただの人間でないことも理解した。何となくだけれど。

「お前、エルドに近づけないのか？魔族とかモンスターじゃないのに？人間なのにか？」
「エルドの樹に近づけるのはエルドの加護を受けたものと・・・。
エルドの使い魔、精霊、そしてエルドの守護者だけのはずだ。・・・
お前何者だ？」

逆に「何者だ」、と言われ、癪に障ったが何とか押さえ込む。
お前が何者だよ。勇者とか言われて納得できねぇのはコッチのはずなのに。

「・・・俺はアルト・クレッシェード。このエルドの森に住んでる。
・・・まぁ、エルドとは《知り合い》だ」

《知り合い》という言葉に男は顔をゆがめたが、それ以上何も聞かなかった。
聞いても自分には関係ないと判断したからなのだろうか。

「俺は・・・魔族と戦うため『精霊王エルド』の加護を受けに来た。
必要不可欠な事だからな」
「・・・俺に頼んでもエルドは返事してくんねぇぞ。・・・おい、エルド」

アルトはエルドの樹の方向を見て、エルドの名前を呼んだ。
エルドは返事をせず、揺ら揺らと大樹を揺らす。

――――ザワァ・・・ァ・・・

「・・・いいってよ。ホラ、右手を差し出せ」
「・・・お前、エルドと会話できるのか？」
「エルドだけじゃない。他の精霊とも会話程度なら出きる」
「・・・」
「ホラ、早くしねぇとエルドの奴、疲れて寝ちまうぞ」

そういわれて男は右手を差し出した。
エルドの大樹が一層輝きを増す。
そして同時に男の右手も輝き、次第にその光は収まっていった。
エルドを見上げると、エルドは疲れたというように輝きが薄まっていく。

「これで大樹に近づけるらしい。・・・って待て。俺はそんなもん貰ってねぇぞ・・・。・・・俺は特別？ふぅん・・・」

アルトは男を見る。
男は右手を見て、アルトのほうを向いた。

「そういや、お前勇者とか名乗ったけど。それ、称号だろうが。名前は？」
「・・・俺の名は、クロウ・ファインダー。『勇者の末裔』だ」
「クロウ？・・・ふぅん・・・。そうだ。魔物。最近ココラ辺で厄介な奴が出たらしいんだ。気をつけたほうがいい。ホレ」

「？」

アルトが投げた子袋を、クロウは受け止める。
その子袋を開けると中には葉が数枚、入っていた。

「何だ？」
「エルドの魔力で育った樹の葉だ。流石にエルドから魔力を奪う行為はできねぇからな」
「・・・礼を言う」
「硬いなぁ」
「？」
「そんなかたっくるしいと、ココラ辺の精霊も警戒すんのも無理ねぇな」

クロウに笑いかける。
さっきから精霊が何だかピリピリしていたのはコイツのせいだったらしい。
ザワザワと、大樹が揺れた気がしたが錯覚だったようだ。
無言でクロウはその子袋を握り締め、後ろを振り向いた。

「じゃーなー。クロウ」
「・・・あぁ」

クロウが去った後、アルトは再びエルドの大樹を見上げた。
エルドから、声が降りかかる。

『アルト。良かったね』
「・・・？何が？」
『もう直ぐわかるよ』
「・・・？」

エルドは嬉しそうにクスクスと、大樹を揺らした。
アルトは、溜息を吐いてエルドの側に腰を下ろした。

◆

「・・・帰ってきたか」

クロウは先ほどエルドの大樹の側で出会った少年、アルトと呼ばれる少年から貰った子袋を握り締め、目の前で王座に座る男を見上げた。
王座に座るのは、この国、フレイア王国の王であるシエル・レイブである。
彼は優しい微笑を見せ、クレイに喋りかけた。

「どうだ？エルドの加護は」
「・・・」
「クロウ？」
「・・・スイマセン。少し考え事をしていまして」
「ところで、クロウよ。仲間はどうする？コチラで派遣を――――――」
「いえ、それなら問題ありません」
「？」
「既に――――決めました」

クロウは自分でも何が可笑しいのか判らないが、微笑を浮かべた。
その微笑は、優しげなものだった。

「支障は起きないでしょう。一目見て、魔力は常人以上だと判りました。・・・それに」

それに。
クロウは笑う。
一目見て、判った。
剣術の腕も申し分はないと。魔力も桁外れである事も。
それ以上に、面白い、気に入ったという感情の方が大きかったけれども。

「戦力にも、申し分はない。いえ、それ以上に、でしょう」
「・・・そうか。なら任せよう」
「・・・では、失礼しました」

王室を後にし、クロウはフレイア王宮内をウロウロする。
すると目の前に1人の男が立っていた。彼の名はレイラという。
年はクロウより上だ。
実を言うとあまりクロウはこの男の事を好いていない。
時折殴り合いの喧嘩に発展する事も数少なくない。
そのたびに他の者に迷惑をかけてしまっていた。

「・・・何の用だ？」
「・・・新しく人員を雇うそうじゃないか」
「・・・まぁな」
「ソイツ、強いのか？」
「判らないな。それは」
「判らない？何でそんな奴を雇うつもりなんだ？」

「人並みはずれた魔力は確かに感じたが・・・。実際戦っているところを見たわけでもないしな。・・・それに、本人にも雇うとは言っていない」

「・・・オイオイ、どうするつもりだよ」

「無理矢理にでも引き入れる」

「・・・嫌われるぞ？」

「構わない」

「・・・そんなんだからお前は・・・」

男は呆れたように言ったが、クロウは楽しそうにまた笑った。

## 1－1　「精霊王エルドの樹」（後書き）

これからよろしくお願いします。

## 1―2　「ドラゴン」

「冷たっ」

エルドの樹の側を流れる冷水に手を突っ込んで、アルトはそんな極普通の、当たり前の反応をした。
土の精霊に悪戯をされ、手がドロだらけになってしまった為、冷水で手を洗っていた。
魔術の修行中に背後から唐突にドロ団子を投げつけられたのだ。
ドロのせいで最初は全身がドロに包まれていたが、今は大分綺麗になった。
すると後ろでクスクスと笑う声が聞こえた。

「・・・後で覚えてろよ土の精霊・・・！」

バシャバシャと水で手を洗い、後ろで笑う土の精霊にそんな怒りの篭った声を出した。
土の精霊は未だにヘラヘラと笑っていたが、フッと何かに感づいたように消えた。

「？」

――――ジャリッ

音のした背後を振り向くと馬に乗った兵隊らしき男がコチラを見ていた。
顔はマントのせいで見えないが、殺気はないらしい。
冷水から手を抜いて、男を睨んだ。

「何だ？アンタ」
「・・・アルト・クレッシェードだな。私はフレイア王国、《竜騎士》のクラッドと言う」
「・・・クラッドさんが俺に何の様？」

イライラした口調でクラッドと名乗った男に聞く。
何だコイツ、顔見えないしフードくらい外せよ。人と話すのにもマナーがあんだろ。
クラッドは無表情のまま、手紙をアルトに差し出した。
それを受け取り、開いて内容を見てみる。

「・・・《魔法騎士団》・・・？」

その内容は、アルトを魔法騎士団に誘うものだった。
全ての内容を見て、アルトは一度息を吐く。
大分暖かくなったせいか、息が白くなる事はなかった。

「断る！」

叫ぶようにそういい、アルトは顔を背ける。

「俺はエルドの側に居る。エルドは俺が護らなければいけないんだ。俺が居なくなったら誰がエルドを護るんだよ！」

自然と口から出てきた言葉に、アルト自身も不思議になる。
俺はエルドを護りたいと思っていたのか？無我夢中で言ってしまったが、どうも《魔法騎士団》に入りたくないという只の口実じゃない気がした。
エルドは、世界樹で――――俺の育ての親で――――存在していなき

ゃいけない存在で――――。
《魔法騎士団》――――フレイア王国を護る魔法を使うものたちを中心とする部隊である。
確か部隊の隊長はまだ青年だと聞いた事がある。
まだ幼い子供でも部隊に配属できるらしい・・・が、それは一部の魔術の才能が在る者だけだ。
アルトにとって、《魔法騎士団》はあまりいい感じはしない。
何故か、その名を聞くだけで胸がざわついたからだ。

「それに、俺は――――」

そこまで言うと、アルトは口を紡いだ。
それに俺は、国から追い出された身だ。今更どうしろというのだ。

「・・・どちらにせよ、貴様はあの方に強制的に部隊に配属される事になるだろう」
「・・・あの方・・・？」
「《魔法騎士団隊長》クロウ・ファインダー様だ」
「！」

昨日の・・・加護って言う物を受けに来た奴か。
アルトは溜息を吐き、男に向き合うと同時に、一瞬空を見上げた。
何かを怒鳴ろうとした瞬間、風が邪魔をした為だ。
風の精霊を一瞬睨んだが、風の精霊はエルドを指差す。
――――ザワ、ザワザワ・・・

「・・・は？」

エルドの大樹が騒がしく唸った。
エルドの感情が流れ込む。

それは、エルドの大いなる意思。

『アルト。僕は大丈夫だ。キミは行くといい。魔術の勉強にもなるだろうしね。それに、キミは人間なのだから、色んな人間とであって学んできた方がいい』

エルドの言葉に、正確には言霊にだが。
ふざけるな、という感情が勝ったが、エルドの意図を掴む。
というか、他の精霊たちが俺の怒りを抑えてくれているようだった。
何とか怒りを抑えきって、エルドを見上げたアルトは、口を開く。

「・・・たまに、来るからな・・・せいぜい魔力の使いすぎには気をつけろよ」

ザワ、ザワ。と、風が吹く。
その風はドコまでも心地いい物だった。
今までに感じたことのない風だな・・・。
――――うん、大丈夫だ。
エルドの大樹が、優しく揺れた気がした。

――――アルトが森を去った後。

エルドは一度人間の姿をして、少し微笑む。
「これで、アルトも大人になるといいんだけどねぇ・・・。・・・・
まぁ、願わない願いかもしれないけど・・・」
そして、今度は何かの大きな意思を感じて背後を見た。

何も無いが、気配を感じる。それも、とても不快な物だった。
（邪悪な気配だな・・・。魔族かな・・・？でも、コレは――――）
「・・・」
眼を閉じ、エルドは姿をゆっくりと消した。
大きな不安と、この不快な気配を胸に。

◆

「ここが城下町なのか？」
「・・・来た事がないのか？」
「あぁー・・・まぁな。・・・大分昔に来たことはあるらしいけど覚えてないんだ」

フレイア城下町。
アルトは歩くたびに周りを見渡す。
何せ今までエルドの森に引きこもりっぱなしだった為、街は見た事がない物ばかりだった。
街は賑わい、配達をしている者、市場で何かを買うものや、話し合っている者などがにぎやかそうに街を歩いている。
するとクラッドが馬に乗ったままジッとアルトを見ていた。
アルトはそのクラッドの視線に気付いて低い声で「なんだよ」と呟く。
「・・・エルドの森でどんな生活をしていたんだ？」

「あ？普通に木の実とか採って調理して食べたり・・・精霊と会話したり・・・後はエルドに魔術の勉強を教わったり・・・？それくらいか？あぁ、後はエルドと一緒に精霊たちと遊んだりしてた」
「・・・」
「・・・何だよ」
「・・・いや。何でもない・・・。・・・」

クラッドは再度、アルトの顔を見る。
エルドの大樹と会話を出来、更に精霊と共に生活をして魔術を教わった人間。
それがどれほど大きな力を、魔力を持っているのか、この少年は、底知れない。

（それに、先ほどから感じている・・・この不思議な気配と、禍々しい気配は何だ・・・）

少年から発せられる魔力とは違う、殺気とも違うこの気配は。
熟練された騎士ならば、それを感じ取る事は他愛無い――――きっと、城の者も、感じる者は少なくないだろう。

「オイ――――？」

後ろを振り向くと先ほどまで後ろを着いて歩いていたアルト・クレッシェードが居ない。
辺りを見渡してみると――――。
市場にアルトは居た。

「お兄さん！味見してかないか！？うちのリンゴは甘いぞ！」
「サンキュー！」
「オイ。何してる？」
「リンゴ貰った！」
「それは見れば判る・・・。・・・・時間がない。寄り道は――――」
そこまで言って、言葉は続かなかった。
というよりも、喋るのを邪魔されたというのが正しいだろう。

――――ズドンッ

「！？」
衝撃が身体を突きぬけ、次の瞬間周囲から悲鳴が上がった。
その悲鳴は天を見てあがった物だった。
アルトとクラッドはその天を見上げる。
「ドラゴン・・・ッ！！？」
「デカッ！！？」

『グォォォァァァァ！！！』

明らかに巨大な竜が、ソコに。
巨大なツバサを広げ、雄たけびを続け、暴れまわり始めた。
「・・・何でこんなところに・・・ッ！！オイ！逃げるぞ！」

クラッドがアルトの手を引いた――――が、アルトはソコから一歩も動こうとはしない。

「お、オイ・・・」

「・・・違う・・・」

アルトはドラゴンの上を見た。

そのドラゴンに乗って、アルトを見ていたのは、黒いアーマーを着た、仮面で顔は見れないが騎士の様な風格だった。

黒い仮面の男はアルトを、俺をジッと見ている。

俺も仮面の男を見続けた。

（何だ？・・・この感覚は・・・）

ザワつく感覚を覚え、吐き気が襲ってきた。

すると仮面の男は左手を天に向かってあげた。

「・・・――――」

『グギャァァァァァァッ！ッ！』

「ッ！」

鼓膜が震えるほどの咆哮を上げた竜は、狂ったように暴れ続ける。

（・・・アレは・・・呪術か？竜を・・・魔法か何かで操って――――）

「おい、何をしている！アルト・クレッシェードッ！！」

――――ズドンッ

「！！うあッ！？？」

ドラゴンがブレスを使い、急に炎を吐いた。
危なかった。もう少ししたら俺は焼け焦げになる所だった。
ドラゴンを見上げ、そして再び黒いアーマーの騎士の様な仮面の男を見遣る。
男は何もせず、ドラゴンの上に乗っているが、きっと神経を集中し、魔法を唱え続けているのだろうと、アルトは予測する。

「《アイス・ブレス》」

アルトは、俺は黒い騎士に向かって、氷結の魔術を唱える。

――――《魔術》と《魔法》は異なる術式だ。
《魔法》はいわゆる呪術の様な物で、魔力と言う物がなければ使用する事は不可能に近いが、魔石を使うことで一般人でも《魔法》の知識さえあれば使用は可能となるが、一方の《魔術》はそうもいかない。
《魔術》も魔力を使用し発動する事ができるが――――そのつど《術式》というものを完成させなければならない。

《術式》というのは、魔法陣の様な事を言う。
普通、《魔術》を使用する際は地面にでも壁にでも陣を、《術式》を完成させなければならないが――――。
アルト・クレッシェードは違った。
アルト・クレッシェードの場合、自分自身が、魔法陣であり、魔力であり、《術式》として《在る》為、彼は現実に描かなくとも、頭の中で《描く事》で《魔術》を発動している。
いわずとも、コレは常人なら行う事すら困難な方法である。

『グギャァァァァァァッ！！！』

「ッ！！」
「・・・――――」

凍り付いてゆくドラゴンの背に乗っていた黒い騎士が、一度そのドラゴンから飛び降りる。
あのまま乗っていれば凍りついてしまうからだ。
倒れ行くドラゴンを尻目に、アルトはその男を見据えた。
先ほどと同じ、不快な感覚が襲う。

「待てッ！！」
「オイッ！？」

アルトは黒い騎士を追い、クラッドがアルトの後を追った。

「・・・クソッ・・・」

「オイ、どうした？何があった？」
「・・・何でもない・・・」
何故かあの黒い騎士について、言ってはいけない気がした。
只の直感だけども、何か――――。

――――トンッ

「！」
急に肩に手を置かれ、アルトは後ろを振り向く。
「アルト・クレッシェードだな」
「・・・？」
「クラッド。遅すぎるぞ。それに何だ？この状況は・・・。ドラゴンが街にいきなり現れ、そのドラゴンを一瞬にして凍りつかせ・・・。何があった？」
「・・・あの」
アルトは恐る恐る急に現れた男に話しかけた。
どうやらクラッドの知り合いらしいけど、クラッドが何故かこの男に対してよそよそしい態度をとっているし、かなり偉い人物なのか？と、そんな風に考えていたからだ。
「・・・あぁ、すまない。私は《魔法騎士団》一番隊・隊長のエルリオス・ドレイドと言う。キミの事は《魔法騎士団》総隊長のクロウ・ファインダー様からおおよそ聞いているが・・・」

マジマジとアルトを見るエルリオスという男に、「何ですか？」と聞いて見た。

「まさか、まだこんなに若いとは思っても居なかった・・・それに、《女の子》だとは・・・」

「・・・は？」

は？という口のまま、アルトは硬直した。
後ろのクラッドはクスクスと笑っている。

・・・女の子？コイツ、女の子とか言ったか？聞き間違いじゃ、ない、の。

そこまで考えて、アルトは息を吸って、吐く。
そしてもう一度大きく息を吸い――――。

「俺は正真正銘ッ！！！男だッ！！！」

そう叫び、大笑いするクラッドを思いっきり睨んでやった。

「え・・・あ・・・そうだったのか・・・その、すまない・・・。
あまりにも、その、中性的で・・・ッ」
「判ってるさ。自分でも自覚してんだよ。自分が童顔くらい！！」

涙目になって言うアルトに、エリオスは申し訳なさそうな顔をする。本当に申し訳ない話だ！クソッ・・・自分で言って悲しくなって来た。

「・・・その、本当、すまない・・・」
「もういいっ！さっさと行くから案内してくれ！」
「じゃあ本部に向かうか・・・ククッ・・・」
「笑うな！！その口二度と喋れないように凍らすぞ！」

しばらく笑い続けるクラッドと申し訳なさそうな顔をし続けるエリオスに、アルトは半泣きになりながら着いて行った。

◆

「・・・ようこそ、《魔法騎士団》へ・・・と、言いたいところだが・・・」

クロウ・ファインダーは本部の門の前で待っていた。
遠くで見えるアルト・クレッシェードと使いに回したクラッド、エリオスを見て「ようこそ」と告げようとしたが、半泣き状態のアルトと笑いを堪えるクラッドと申し訳なさそうな、気まずい雰囲気を出しているエリオス。
アルトに「何があった？」と聞いて見た。

「・・・聞かないでくれ・・・」

そういいアルトは俯き落ち込み度が半端無い状態でクロウを見た。
ゴホンッと、堰をし、アルトに向かって手を差し伸べる。
その手を見て、ようやく俯き加減になっていた顔を上げた。

「改めて、ようこそ。《魔法騎士団》へ。アルト・クレッシェード」
「・・・」

目を丸くしたアルトの目に飛び込んできたのは、大きな古城――――
――フレイア王宮だった。
アルトは差し伸べた手を、ゆっくり握り返したのだった。

## 1―2　「ドラゴン」（後書き）

間違った点や文章が可笑しいと思った時は直ぐに編集します

## 1―3　「ゆっくりと回りだす針」

「・・・」

暗い何処かの屋敷内。
まるで王が座るような大きな椅子に、長い黒髪を垂らした男は座っていた。
男は何も言わず、座っているがその顔は何時もどおりの無表情ではなく、少々歪んだ物だった。
しばらく目を閉じた男は、ある映像を見続けた。
1人の少年がエルドと呼ばれる、聖なる大樹の前に佇み、天を仰いでいる映像。
そしてその少年が何者なのかを、その少年が何故自らの《力》と共鳴しているのかを。
その男は、目を開く。

「どうかなされたのですか？」

目の前に立つ、金髪の少年は尋ねた。
フッと、微笑んだ後、口を開いた。

「人間とは、愚かな物だ・・・。・・・だが、もしかするとそうでない者も居るのかも知れんな」
「・・・？」
「・・・ククッ・・・面白いな。・・・因果とは」

◆

「・・・というわけで、今回から我が部隊に配属されたアルト・クレッシェードだ」
「・・・えぇっと・・・。よ、よろしくお願いします・・・」
確実に緊張した声でアルトは頭を下げた。
あの後、クロウに案内されて此処、魔法騎士団第零部隊に来ていたが・・・。
周りの視線が痛く突き刺さる・・・。
横をチラッと見るとクロウが少しだけ笑っていた。

（コイツ今すぐ殴りてぇ・・・）

自分でも顔が火照っているのが判った。
視線が突き刺さるのも無理は無い。
その理由は、アルトの隊服が少なからず関わっているだろう。
他の者を見ると黒が強調された隊服ばかりなのに対し、アルトが着た隊服は長い黒マントに元は彼等と同じであっただろう隊服は、白色に変えられていた。
一見すれば何処かの貴族の様であるその風貌は、視線を集中させるのには十分だった。
「アルト・クレッシェード。俺は他の仕事がある。しばらく休んでいろ。長旅だったからな」

「・・・マジで？」

俺を置いていくのかよ！こんな視線が突き刺さるような場所に！
すると殺気めいた物を感じてすばやくしゃがんだ途端、壁にはナイフが突き刺さっていた。

――――ヒュガッ

「うぉあっ！？」

次々と飛んで来るナイフに、アルトは全てそれらを避ける。
全部で七本くらい飛んだあと、殺気とナイフが飛んでくる事は無かった。

「へぇ。お前全部避けれるんだ」
「・・・あーっと・・・。えー・・・？」

ナイフと目の前に立ちはだかる紅い髪の青年を見比べたアルトは恐る恐るナイフを一本引き抜いた。

「・・・自己紹介からだな。さっきナイフを投げたのはこの俺だ。
名は、アイリス・クラウディアという」
「・・・はぁ・・・」

すると今度は黒髪の青年が近付いて、アルトに手を差し伸べた。
他の者も前に出て、アルトの前に立つ。

「俺の名前はレイリア・ファースト。魔物使いだ。アイツのナイフを避けれるなんてお前大した奴だな」
「私の名はフレルル・シャイテットといいます。これからよろしくお願いしますね。アルトさん」

その場に居た全員が一通り名乗った後、レイリアという青年が笑った。

「・・・まぁ、大体これくらいだな。・・・あーっと。他にもメカニックのアイツが居たか・・・」
「？」
「ま、そのうち会えるだろう。それより――――――」

一度言葉を病め、息を大きく吸ったレイリアは声を大きく張り上げた。

「歓迎会だッ！！！」
「おぉぉーーーーッ！！！」
「・・・は、え・・・歓迎会！？」
「まず肉の用意だ！」
「既に用意済みですわ」
「流石だフレルル！直ぐに鉄板の準備だ！」

ワイワイと周りが騒がしくなる中、アルトは切り替えの早さに呆然と立ち尽くす。
え・・・いや、歓迎会？
嬉しいけども・・・何か・・・。

「・・・オイ」
「え、あ。えーっと。クラウディア・・・さん」
「クラウディアでいい。・・・最初は慣れないだろうが、直ぐに慣れる。ここのやつらはバカが多いからな」
「・・・バ・・・はぁ・・・」

すると遠い場所からまたしても声が張り上げられた。

「オーイ！アルト君！早くしないと肉無くなるぞ！」
「えっ・・・いや、俺は・・・」
「遠慮しなくていいから！早く来い！クラウディアも！」
「・・・行くぞ。あいつ等はモンスター並みの肉食だからな。直ぐなくなる」
「・・・えぇ・・・」

たった一日でこれだけ疲れるとは思わなかったアルトは、肩を落とし、彼らの元へ歩いていった。
席に座ってしばらくドンちゃん騒ぎをした後、全員が酔いつぶれてしまった。
アルトは苦笑しながら、バーベキュー用の焚き火に当たり続けていた。
空を見上げ、月を見ていたとき。
フッと、エルドを思い出す。

「・・・ハァ・・・」

駄目だな、ここまで来ると。
俺は親ばかなのか？・・・いや、何か・・・俺が親離れできてないって感じか・・・。

――――コツッ・・・

「・・・？」

靴の音が聞こえて、後ろを振り向く。
ソコに立っていたのは、水色の髪と透き通った白色の目をした少女だった。
髪と同じ色の水色のワンピースを着て、何故かウサギの人形を抱きしめてコチラをジッと見ている。

「・・・アルト・クレッシェード・・・」

少女がボソリと呟いて、コチラへゆっくりと近付いてくる。

――――ズキンッ・・・

「！」

右目が痛み出し、右手で左目を抑える。
スッと、少女がその右目に触れようとしているのかウサギの人形を抱いている片方の・・・左手をアルトの右目に触れた。

「呪われた・・・右目・・・。神に忌み嫌われしその右目は・・・」

少女はぼそぼそと喋り、右目が段々と痛み出す。
視界が歪んでいく。
神に忌み嫌われし右目？
何だ、それ。
少女の紡ぐ言葉が、段々と痛みを引き出しているように思えた。
少女は次々と言葉を紡いでゆく。
少女から発せられるのは神、そして忌み嫌われし、という単語が多かった。

「その右目の扱いには・・・気をつけたほうが、いい」

そして少女はひとしきり言葉を言うと、スッと消えて行った。
痛みがゆっくりと、和らいでゆく。

「・・・」

なんだったんだ？あの少女は。
アルトは右目に触れ、ゆっくりと月を見上げた。

「・・・？」

――ザザッ・・・

月が一瞬赤く思えたが、どうやら幻覚だったようだ。
幻覚だったと、信じたかったのかもしれない。
アルトはゆっくりと、その場で目を閉じた。

◆

――――数千年前。
《勇者》と謳われた者が此処に、愚かな人間を連れて立ちはだかった。
その中に居た、魔術師は俺に静かにこういった。

「お前は寂しい生き物だな」

何がだ。
確かそんな事を、数千年前、魔術師に聞いた。
《勇者》達は既に気を失い、残りはこの愚かな人間の仲間をしている我々《魔族の血》を持つ者の魔術師だけだった。
直ぐに殺せばいいはずだ。

なのに。

「お前はとても、孤独だ」

その言葉が、俺を動揺させた。
それに、魔術師は攻撃を一切してこない。

「・・・魔王というのも、楽じゃないようだな」
澄んだ瞳を見せ、確かに魔術師は微笑んだ。
ドコまでも見透かされたようなその瞳が、どうしても俺を動揺させる。

「人間と魔族の違いなんて、無いのに。何故、戦おうとするんだろうな」
そんなの。
魔術師は右手をスッと前に突き出した。

「魔王よ。私は勇者を護る元《魔族》の魔術師なり。反逆者として・・・殺したくば殺すが良い」

その言葉に呼応する様に、俺はその魔術師を殺した。
《反逆者》として。
《魔王の命を狙ったもの》として。

「・・・」

目を覚まし、俺は周りを見渡した。
何の変哲も無い、自室だった。

「・・・」

真っ赤に血塗れた右手を見て、勿論、幻覚だったが・・・。
俺は顔を歪めた。

「・・・」

目を閉じ、精神を集中させる。

――――――そこに、懐かしい魔力を感じた。

・・・微かだが、確かに美しいその漆黒の魔力は、まるで自分を誘っているようにも思えた。
そうして世界は、魔界は動き出す。
ゆっくりだが、確実に。

・・・また、あの魔術師に会えるだろうか。

「ハッ・・・」

死人に会えるなど、可笑しなことを言う。
けれどもそれもまた、何故か可笑しな事だとは思わなかった。
会えるような気がしてならない。

「・・・待っていろ。魔術師・・・」

俺は少し笑い、側にあった上着を着て次の作戦へ向かった。

## 1―3　「ゆっくりと回りだす針」（後書き）

今回も短いですね・・・スイマセンｏｒｚ

## 1―4 「戦闘」

「・・・う・・・？」

目を覚ますと朝日が目に飛び込んできた。
周りを見るとまだほとんどが熟睡していて一行に目を覚まそうとはしない。
ビールの瓶がアチコチに乱雑にちらばっていた。

「・・・ハァ・・・」

側にあった脱いでおいたマントを側において、ボォッと空を見る。

（何だか変な夢を見てたみたいだ。・・・にしても、痛みまで感じるとか・・・どんだけリアルなんだよ）

アルトは立ち上がって空を見上げた。
澄んだ空の中、魔法陣が大きく描かれている。
空中に浮かぶあの魔法陣は、この大都市に結界を作っているようだ。
魔物が来ないように、か。
結界には色んな種類があるが、アレは大型の魔除けの種類の結界らしい。
すると後ろからガチャガチャと言う物音が聞こえてきた。
振り向くと機械を弄っている少年がソコに座っていた。
俺よりも年下だろう少年は、俺に気が付くとフッと俺を見た。

「・・・何？」
「あ、いや・・・何作ってるの？」
「・・・戦闘魔法兵器」

戦闘魔法兵器・・・？
アルトは首をかしげて、彼が作っているものをのぞいた。
筒の様な物に魔法石を取り付けているようだった。
魔法石の色は赤で、攻撃タイプの石ではあったが、純度が弱く、攻撃力は低いものだと判断したアルトは、持っていた鉱石の中で標準クラスの物を選んで差し出す。
破壊力が強いと扱いが難しくなるから、コレくらいが調度いいだろう。

「・・・ありがと」

そういって受け取った少年は、嬉しそうに機械にはめ込んだ。

「・・・誰？」
「えーっと。俺はアルト・クレッシェードっていうんだ。昨日、此処の部隊に配属になったんだ」
「・・・アルト。・・・俺は魔道機械製作師、クライト・クライア」
「クライトか。よろしくな」

アルトが手を差し伸べるとクライトはその手を軽く握った。

「・・・」
「・・・？」

ジィッと、コチラを見ているのでアルトは不思議そうに首をかしげた。
・・・何だか最近、色んな奴に顔を見られるような気がする。

「何か顔についてるか？」

「・・・別に・・・。・・・なぁ」
「何だ？」
「・・・お前、兄妹居たりとかする？」
「・・・居ないと思うけど」
「居ないと、思う？」
「・・・俺、捨て子だったから。ずっとエルドに育てられてきたし」
「・・・・」
「だから兄弟がいるとか居ないとかは、全く判らない」
「・・・そう」

そう短く答えると、クライトはまた機械に向き直った。
カチャカチャという金属がぶつかり合う音だけが静寂を支配した。
若干、空気が重く感じられる・・・。
・・・嫌だな、この空気。

「・・・ねぇ」
「？」
「アルトは、」

――――ズンッ

地面が沈むような振動を感じて、アルト――――俺は、何とかその場に踏ん張った。
振動で全員が一気に眼を覚まして飛び起きる。

「なんっ何だァ！？」

警報が急に鳴り出し、アナウンスらしき物が響いた。

《――――前方に悪魔を発見。直ちに総員位置に付け》

「チィッッ！オイ！新入り、早く位置に着け！」
「い、位置って・・・！？」
「適当に悪魔を迎え打てばいいんだよ！」
「は、はぁ・・・」
俺は側に置いてあったマントを羽織って、外に飛び出した。

◆

「・・・何だ？あの悪魔は・・・？」

モニター越しで突如現れた悪魔を凝視する。
悪魔の証明ともいえる黒い、暗い魔力があふれ出しているのは確かだが・・・。
・・・それにしたって様子がおかしすぎる。
悪魔らしき者は黒いフードで身を隠し、顔は仮面で隠していた。
暗い魔力をあたりにあふれ出し、城を見続ける。
悪魔はユラリとこちらを見た。
仮面からのぞき見える、赤い、眼が。
コチラを、凝視する。

「！！」
「来ます！！」
悪魔野右手がゆっくりとこちらに向けられる。
その右手が淡い赤い光を放ち、やがてその光は大きくなって、放出された。
「ぐっ・・・」
何とか結界で防いだものの、城はあまり持ちそうにも無い。
コレをこのまま何発も喰らえば・・・。
悪魔が再びその右手に魔力を込める。
詠唱が、小さく聞こえた。
「・・・ッ」
――――――ズドォォォォンッ
砲撃が一斉に何種類にも分かれてコチラにめがけて放たれる。
「っつぅ・・・」
「！」
目の前。
煙が晴れて、結界を造り出して悪魔の前に立っていたのは。
「アルト・クレッシェード！！」

「何！？」

（あの魔砲撃の中を・・・歩いてきたのか！？）

アルト・クレッシェードは何食わぬ顔で、溜息混じりに男を見やる。
男は何も喋らないまま、目の前に唐突に現れたアルトへ視線を変える。

「――――お前。何か喋れよ」

ただ、そう言ったアルトはタンッと音を立てて靴のつま先で地面を叩いた。
巨大な魔法陣が、地面に現れる。

「なっ・・・」
「じゃないと、このまま攻撃するぜ」
「・・・！」

初めて男の顔に焦りが感じられる。
その視線はアルトから、魔法陣へ変わり、直ぐにアルトの顔を見た。
魔法陣が青い光を帯びながら、発動の準備を終える。
アルトは、何とか自分の感情を抑えようと深呼吸を何度も繰り返した。

（幾ら得意な術式だからって・・・簡単に時間を長く費やせるようなものじゃない・・・。早く終わらせないとな）

すると男は一度溜息を吐き、アルトを見る。

「・・・アルト・クレッシェード・・・」

「・・・？」

フッと、視界から男が消えた。
油断していたか、と気配を探るが、その必要は無くなる。

「・・・何故、此処に・・・」
「ッ！」

目の前まで接近してきた男に、反射的にアルトは魔方陣の発動を行おうとした。
だが、魔法陣は破壊される。
粉々に砕け散った、青い破片は、魔力となって消えて行った。

「・・・しまっ」

ガンッ

「！」

思いっきり頭を鷲掴みにされ、まるで脳が揺さぶられるような感覚に陥る。
記憶が、揺さぶられる。

「あ、がっ・・・！？」

忘れていた記憶が、底から浮き上がってくる。
まるで、深海から泡が出てくるように。
忘れかけていた記憶でさえ、溢れていく。

（・・・意識、が）

落ちていく、闇の底へ。
ゆっくりと、瞼を閉じ掛ける。
世界が段々と、色褪せてゆく。

「新米ッ！！防御しろッ！」
「ッ！」
「・・・魔道砲、魔力充電完了」

――――――ズドンッ

青い光が矢となって男の身体を掠めた。
強制的に覚醒させられた頭で、アルトは後方を見遣った。
後方にいたのは、魔道兵器と呼ばれる筒状の物に魔石を埋め込んだ物。
魔石からは、青い光が放出されている。

「・・・ッ・・・」
「・・・クッ」

男が魔法を発動させようとした。
黒い光が男の右手へ集中的に集まってゆく。

「我は魔の力を受け入れし闇。光を受け入れし人共を掃討せし存在である。我の魔力に呼応せし精霊。闇を持って、光を掃討せよ。闇の精霊、汝の力を借りて我は光を掃討せん」

極めて複雑に組み替えられ短く唱えられた詠唱に呼応するように、

暗い光がアルトに向かって放たれた。

―――タンッ

再びつま先で地面を叩く。
今度はより複雑な魔法陣へと作り変えた。

「・・・破壊王の審判（デストロイ・ジャッジメント）」

魔法陣から、眩いばかりの赤い光が溢れ出した。
その魔法陣からみえる暗い底の見えない闇から這い上がってきたのは、《鬼》と呼ばれる魔族の中で第三勢力と恐れられる種族だった。
《鬼》は巨大な目玉でアルトを見遣った後、目の前の見知らぬ男に今度は視線を遣った。
《鬼》は奇怪な音を発す。
否、ソレは言葉だ。
人間にとって、音と呼ばれる物に近いだけだ。

『貴様か・・・。我を呼んだのは。・・・貴様が我を呼ぶのはもう何年ぶりになるだろうな』
「・・・は？」

アルトは首をかしげた。
何故ならアルトは《鬼》と呼ばれる存在を召喚するのは初めてだったからだ。
正直なところ、今までならあまり召喚術と呼ばれる魔術儀式など興味は無かったが、今回だけは相手に合わせてソレ相応の力の持ち主に頼ろうと、魔の存在である《鬼》に頼っただけなのだが。

《鬼》はアルトを見遣る。

『なるほど。貴様・・・禁忌を』

「・・・？」

『記憶が無いのか・・・まぁいい。今回は手を貸してやろう』

《鬼》は咆哮する。

その咆哮に呼応するかのように、術で操られたドラゴンが姿を現す。

「な、なんだぁ！？」

「・・・召喚術・・・」

「あ？んだソレ？」

「・・・かつて古の時代にあった忘れられた魔術儀式。魔の存在と契約を果たした末に習得できるという高等技術の上、エルドの守護を受けた者しか使用は硬く禁じられているはずだが・・・」

（それ以外に考えられるとなれば・・・）

すると《鬼》が一際大きい咆哮を上げた。

天にまで響くその咆哮は、魔力に変換され魔術と化して天から地へと再び帰ってくる。

さながら、散弾銃の弾丸の如く、光となって。

「グッ・・・」

このままでは危険と判断したのか、男はドラゴンと共に消えて行った。

さながらメテオと化した光の散弾は、ゆっくりと収まっていく。

後に残ったのは、《鬼》と、静寂だけだった。

その静寂を破ったのは、クロウ・デリットで、口を開く。

「《鬼》・・・本当の名前、あるんだろ？教えてくれねぇか？」
『何故貴様に？』
「また呼び出すかもしれねぇし・・・。またあんな奴出てきたら召喚術くらい使うかもしれない。それに《鬼》じゃ呼びにくいしな。別にいいだろ？減るもんじゃないし」
『・・・』

《鬼》は一瞬黙った後、口を開く。

『我が名は、鬼族第一級鬼神、《クロト》である。・・・人間、アルト・クレッシェードよ。我が名を心して受け取るが良い』

それだけ言うと、鬼神（クロト）は消えて行った。
周りはクロトとの会話など勿論聞こえるはずもなく唖然とこちらを見ている。
アルトはソレに気付いて、全員の方を振り向いた。

（気まずいんだけど・・・どうしたらいいんだよ）

「え、えーっと・・・終わり、ました・・・」

その声に、しばらく沈黙していたが、やがて全員が歓声を上げた。

「新米スゲーッ！」
「頼もしいぜ！これから宜しくな！」
「え、あ、いや・・・」

顔が火照っているのに気付いて、アルトは急いで顔を隠した。
何だか嬉しいけれども、恥ずかしい。

「よっし！今日は勝利祝いにパーティーだ！」

（えぇぇぇぇ！）

昨日に続けてパーティーをまたするのか。
苦笑しながら、アルトはそのまま小隊の皆に連れられその場を後にした。

◆

「・・・報告します」

黒い仮面を被った悪魔は、ゆっくりと頭を下げ、ひざまづいたまま俺の顔を見た。
この悪魔の名は、誰も知らない。
なんて呼べばいいか迷った末、本人が《ナニカ》と呼んで欲しいと、そう言った。
俺は玉座に座ったまま、その男の報告を聞く。
王間は、静寂だけが支配している為、しばらく沈黙していた男がゆっくりと口を開く。

「・・・魔族同様の魔力を持つ人間と今日、対峙しました」
「・・・魔族同様の、魔力」

そんな人間は未だかつて、１人しか知らない。
勿論、ソイツだって人間ではないが、人間としての存在に近い者だったことは間違いない。

「・・・ソイツの名は、聞いたか」
「・・・・アルト・クレッシェード、と」
「・・・何？」

アルト・クレッシェード。
・・・なるほど。それが、名か。
胸に光る青い石のペンダントを握り締め、仮面の男を見遣る。

「報告ご苦労・・・。・・・興味があるな。そのアルト・クレッシェードとやらは。・・・一度会ってみたい物だ」

そういうと、俺は玉座から立ち上がって笑う。

「《ナニカ》に命ずる。アルト・クレッシェードを我の元へ連れて来い」
「・・・ハッ」

仮面の男は煙となってこの場から消える。
青い石のペンダントは、青い輝きを放ちながらこの暗い世界を映している。
アルト・クレッシェード。
何故その名が、今語られるのか。
どこかで、あの《魔術師》が微笑んでいるような気がした。

## 1―5　「女神イリス」

「新米ッ！遠慮しなくていいぞ飲め飲め！」
「あ、いや、俺、未成年・・・」
「んなの関係ねェ。飲め！」

（酔っ払いメンドクセェー！）

再びパーティーを開いた第零部隊は忘年会の様な騒ぎで飲食をしていた。
俺はあの仮面の男が何者なのか、気が気ではないんだが・・・。
するとコトン、と音を立てて肉の乗った皿とオレンジジュースの入ったコップがほぼ同時に目の前に置かれた。

「・・・肉」
「あ、アリガトウ」
「ジュースも飲むか？」
「あ、うん」

クラウディアとクライトにジュースと肉を貰って俺はソレを食す。
流石に飲酒はマズイからなぁ。
というか、昔ジュースと酒を間違えて飲んだ事があって、そのときの事は正直言うとあまり覚えていないがエルドに言わせると酒乱だったらしく、それ以来自分でも、エルドも飲酒を硬く禁じた。
ドンッと直ぐ目の前にビールジョッキを置かれる。

「がははっ！アルト！それにしてもお前のアレ、どうやって使ったんだ？」
「え、あーっと。・・・適当、です」

「適当？あんなもん適当なんかで使えるような代物か？」
「まぁ、多少は色々、考えて術式を組み込んだりしたんですけど・・・。大体は勘で・・・」

嘘はついてない。
咄嗟に思いついた術式を一か八かであの時、発動したのだから。
発動しなければ全員があの黒い仮面の男にやられていた。
ほとんど考える余裕もなかったアノ場合仕方が無いと思っている。

「やっぱすげーなお前！」
「え、いや」

顔が火照るのが自分でも判った。

（褒められるのは慣れてないんだよなぁ・・・）

ずっと、人間に嫌われていたものだから、好かれるのは慣れていない。
――――この人たちが、俺の眼の事を知ったら？

ドクン、

「・・・」
「・・・どうした？」
「あ、いや。何でもない・・・」
「・・・」
「お前ら、良くやるな・・・」
「お、クロウ様もどうです？一杯！」
「いや、俺は仕事中だからな・・・遠慮しとこう」

（・・・あ？クロウって何歳なんだ？）

クロウは飲酒を断るとアルトの目の前まで歩いて来た。

「・・・流石だな。まさか召喚術を使うとは」

「・・・本当は召喚術とか得意じゃなかったんだけどな。アノ場合、召喚術が適当だと思ったんだよ」

「にしても、お前はエルドの加護を受けていないはずだが、何故召喚術が使えるんだ？」

「え？召喚術ってエルドの加護が必要なのか？」

まずそのこと事態知らない。

アルトは召喚術を魔人や魔族、鬼神、精霊族などを呼び出し、力を借りるというくらいしか解釈していなかったのだ。

「・・・それだけの知識で召喚術という高等魔法を使用できたのか？」

「あーっと・・・何かまずかったか？」

「いや・・・結果的に術式は完璧だったから問題はないが・・・」

「なら別にいいじゃん」

「・・・」

アルトはジュースを口に含んで、フッと空を見上げる。

此処に来て二度目の夜。

右目に、かすかに痛みを感じた。

「・・・」

月夜になると、少し痛み出す。

毎回の事で、気にはしない。

アルトは右手を見る。
魔力を静かに集中して、右手をクロウに見せた。
「・・・氷塊(アイス・ソング・ブレス)の音響」
周りの水蒸気が右手に集まり、まるで鉄琴の様な綺麗な音を響かせて氷の塊を造ってゆく。
形作られたのは長い髪の女神。
コノ世界では光の女神と呼ばれる《イリス》だ。
「・・・器用だな」
「まぁ、魔術は得意だから。これくらいはやっておけないとコントロールその物がむずいんだよ。魔法と違ってな」
魔法というのは爆発的に力を発するのに対し、魔術はそれなりにコントロールを有しないと暴走する可能性が高い。
だから日々こうやってコントロールの特訓をしなければ腕がなまる。
氷を机の上に置く。
「ソレ、解けないからやる」
「・・・女神イリス、か」
かつてコノ世界に存在した、実際に居た女神の1人。
魔族から人間達を護った神々の一人でもある。
《イリス》は数千年前、勇者と共に戦った。
その強大な聖なる魔力で魔族達を迎え撃ったという。
戦いの末、《イリス》は強大な邪の魔力を持つ、魔人に破れ、戦死したと語られている。
「・・・女神イリスはエルドと交流があったんだ」

「・・・そうなのか？」
「イリスにはもう1つの名がある。《預言者》・・・。イリスは未来を、自分の死を予言していた。エルドはソレを聞いて、悲しんだ。イリスは自分が死ぬ事を知った上で戦いに挑んだんだ。そしてイリスは最後に、エルドに自らを大樹の魔力の源になるよう頼んだ。・・・そして、今、その《イリスの加護》が失われつつある。・・・原因は邪気が、強くなった所為だ」
「・・・イリスは永遠にエルドの大樹の中で生きているのか・・・？」
「あぁ。多分、今も必死でエルドを護ろうとしている。エルドは聖なる大樹であるが故に、邪気にも侵食されやすいからな」
アルトは溜息を吐く。
「本当は俺が護らなきゃいけないんだけどな・・・」
「・・・」
ジィッと、クロウがこちらを見てくるのに気付いてアルトは「何だよ」、と呟く。
「お前、本当にエルドのことが心配なんだな」
そういって笑うクロウに、アルトの顔は一瞬にして赤くなる。
ボッと湯気が出ているようだ。
「な、なんっ・・・」
「じゃあ、俺はこれから仕事がある。また会おう」
そういってクロウはどこかへ行ってしまった。
アルトは顔を何とか冷やそうとソコにあった飲み物を適当に掴んで

勢い良く飲み干した。

「あッ！！」

「！！？」

思わず噴出しそうになるのを堪え、フレルルを見ると慌てた表情でこちらを見ていた。

「何ですか・・・？」

「そ、ソレ、お酒・・・」

「えっ？」

グラッと視界が勢い良く歪む。

顔が更に熱くなるのを感じた。

「ちょっ！何で目の前にお酒を置いておくのです！？彼は未成年ですよ！」

「うっ・・・」

「大丈夫か？吐き気とか・・・」

（何か、視界が歪む・・・。気持ち悪い・・・）

「・・・うっ」

今回は酒乱にならずに済みそうだが、酷い吐き気と胸焼けがする。

こみ上げてくる異物に、俺はたまらず近くに設置されているトイレへ駆け込んだ。

しばらくして、吐くだけ吐いた後アルトは顔を真っ青にしながらトイレから出てきた。

「・・・大丈夫？」

「だ、だいじょーぶ・・・」

背中をさすってくれるクライトに礼を言いながら椅子に座り、気分を落ち着かせる。

（マジで飲ませやがった・・・アノ酔っ払い・・・）

吐き気を若干抑えながらも、アルトは溜息を吐く。

鏡を見るとまだ顔が青いが、大分マシになってきた。

「・・・ねぇ、アルトは」

「ウン？」

「・・・魔術を、どうやって使えるようになったの・・・？」

その質問に、アルトの心臓はドクン、と一度跳ねる様に高鳴った。

上手く、息が続かない。

「魔術、は――――――練習したんだよ」

「練習？」

「修行。・・・したんだ。・・・一応」

「一応？」

「・・・」

右目の事を知ったら、きっと。

――――「化け物――――――」

――――「近付くな！俺達まで呪われる！」

「・・・ッ」

「・・・話したくないなら、良い」

そういうとクライトは溜息を吐く。
アルトも同じくして溜息を吐いた。
いつか話さなくちゃならない。

「・・・ゴメン」

ぼそりと呟いて、アルトはもう一度溜息を吐く。

「溜息、吐くと幸せ、逃げちゃいますよ？」

「うぉあッ！？」

唐突に耳元で言葉を吐かれ、驚いて椅子から倒れそうになった。

「・・・レイス」

「へ？」

「始めまして・・・。アルト君・・・だっけ」

レイスと呼ばれた少年はニッコリとアルトに笑いかけ、クライトは何故か睨むようにレイスを見ている。

物凄い殺気を感じるんだが・・・。
レイスは汗を流しながらアルトの方を向いた。
「何か・・・クライトには嫌われていてね・・・」
「そ、そうなんだ・・・」
「・・・（ボソッ）二重人格野郎・・・」
「へ？」
「あはははは・・・」

（今ぼそりと何だか聞き逃してはいけない単語が聞こえたような・・・）

レイスはアルトを見て少しだけ微笑んだ。
「えっと、僕、頼りないけどコレから宜しくね・・・」
「あ、うん」

何だか気弱そうな人だなぁ、と言うのが第一印象だった。
するとコトッと目の前に水がコップに入れられて置かれた。
「気分は良くなりましたか？」
「あ、アリガトウございます。フレルルさん」
コップを取り、水を口に含む。
レイスに気付いたのかフレルルはあら、と呟いた。
「レイスも居たんですの？」
「あ、ハイ。一応・・・」
「・・・今まで何処に居たんだよ」

「あ、えっと。ちょっと散歩を・・・」
「・・・」
「そうでしたわ。アルトさん。貴方に見せたいものがあるのでした」
「見せたいもの・・・？」

フレルルさんはコッチに来るよう手で招くと。
アルトはレイスとクライトと別れるとフレルルに着いていく。
王宮内は広く、真っ白な壁だけが広がっていた。
壁につるされたカンテラからは、淡い炎が灯っていた。

「ここですわ」
「・・・コレは・・・」

大き目の門の様な扉を目の前にしたアルトは、息を呑んだ。
知っている。
扉に描かれたある紋章は、アルトの知っている魔術形式だった。
ソレは光を表した紋章。

「・・・女神、イリスの魔術形状紋章・・・」
「そう。別名コードとも呼ばれる高度魔術」

コードとは、魔術の基本形術式だがソレを極めればどんな魔術より
高度で複雑で強力な魔術と化す。
しかもそのコードを発動した術者が女神ならなおさら強力な術とな
っているだろう。

「・・・何でこんな物が此処に・・・」
「・・・女神イリスは、かつてフレイア王宮直属の女神だったのです」

その事実に、アルトは少なからず驚く。
女神イリスは、本来は人嫌いだったはずだ。
人類達と共に戦ったのは、愛した人間が地上にいたからだ。
それに、女神イリスは。

「群れる事を最も嫌っていた――――」
「えぇ。確かにそうですわ。良く知っていますわね」
「・・・まぁ」
「あぁ、確か、エルドに育てられたのでしたわね・・・。なら、知っていても不思議ではないはずですわ」
「・・・」
「・・・イリスは、フレイア王宮の王と契約しておりました」

契約。
《契約》とは、いわゆる絆に近い物だ。
魔術や魔法など関係なく、ただ、絆と言う心の力でソレは成り立つ。
《契約》は、魔術や魔法と比べられるほどの術だ。
最強の絆を持つ者に、魔術師は、魔族は、魔法使いは敵わない。

（絆を超える物など、無い・・・か）

「王と？愛人ではなく、か？」
「はい。イリスは愛人ではなく、王と契約をされておりました。愛と絆は別格ですわよ？」
クスリ、と笑うフレルルに、アルトは顔を歪める。
フレルルの意図がつかめないからだ。

（何故俺を此処に連れてきたのか）

「・・・さぁ、中に入りましょうか」

フレルルは何処からかクリスタルで造られた鍵を取り出した。
鍵は金色の光を放ちながら、扉と共鳴する。
扉と鍵は、お互いに求めるように音を鳴らした。
キィーン、という様な、音。
耳障りではなく、心地が良い音だった。
吸い込まれるように鍵は鍵穴へと差し込まれる。

「・・・！」

金色の粒子を放つその部屋は、玉座の様な椅子の上に巨大な蒼く、透き通るクリスタルが中空に浮いていた。
クリスタルはまるで、全てを見透かすようにアルトを映し出す。
だが、クリスタルに映し出されたのはアルトだけで、一向にフレルルという人物の姿は映そうとはしない。

「・・・フレルル・・・？」
「・・・私の姿は映されないのですよ」
「・・・？」
「私は一応、女神の血を引く巫女ですから」
「・・・巫女・・・？」

聞いた事があった。
女神と人間の間に生まれた子供。
ソレは巫女と呼ばれている。

巫女は聖なる魔力をその身に生まれながら纏い、邪気を払う術を持つ者の事だ。
フレルルは微笑みながら、アルトを見る。

「イリスほどではありませんが、ね」
「・・・だったら」

アルトは顔を上げる。
フレルルを見上げる形となった。

「俺の事も、最初から判ってた訳？」
「・・・大体は、ですね。・・・ですが、貴方に纏わり付くその邪気の正体が何なのかまでは突き止められませんでしたわ」
「・・・昨日今日で見極められる代物でもないしな」
「呪いの類、ですか？」
「・・・まぁな」

アルトは苦笑する。
忌まわしきこの右目は、俺が生きている限り存在し続ける。
魔力の宿ったこの右目は、魔族同様の力を発すると。
精霊王エルドがある日、そう告白した。
もう、隠し切れないとでも思ったのだろう。
うすうす、この右目が原因である事はわかっていた。
人間達に何故嫌われていたのか。
嫌悪感を表されていたのか。
今なら痛いほどわかる。
得体の知れない物ほど、怖い物は無い。

「・・・まぁ、貴方から話す時を、私は心から待っていますわ」
「・・・」

「忠告しておきましょう。アルトさん」
「・・・？」
「私達はまだ、貴方の事を信用しておりません」

そういって、フレルルは微笑んだ。
女神のように、優しい笑顔で現実を突きつけられる。
人間がそう簡単に、人を信じるわけが無い。
安易に人を信じれば、逆に自分が落とされかねないと、本能的に判っているからだ。
理論的に、判っているからだ。

「・・・判ってたよ。そんなの。・・・痛いくらい」
「・・・それと。・・・貴方は精霊たちと、魔族とも話せるようですわね？」
「・・・あぁ。それが何だ？」
「・・・ですが貴方は、天使・・・《天神達とは話せない》」
「！」
「・・・ではごきげんよう」

そういうとフレルルは部屋を後にし、消えて行った。

◆

「・・・・♪」
『・・・いいのか？』

「何がですか？」

フレルルは側に現れた金の羽根を生やした天使に話しかける。
彼はフレルルの眷属、名はレイシアと呼ぶ。
レイシアは苦い顔でフレルルを見る。

『あの少年だ』
「あぁ、彼なら大丈夫ですわよ。どうやら自覚していたようですし・・・。あの驚きは何故知っているのか、っていう方の驚きでしたわ」
『・・・悪魔』
「私は女神の血を引く巫女ですわよ？」

ヘラッと笑うフレルルに、レイシアは溜息を吐く。
レイシアはあの少年の事を思い出す。

『・・・にしても、彼、誰かに似ていないか？』
「・・・いえ。そうは思いませんでしたわ」
『・・・いや。誰かに似ている。しかもソックリだ』

彼の容姿といい、魔力といい、あの魔術といい。
誰かに酷似しているように思えなかったレイシアは、考え込むように腕を組んだ。

「それよりお腹が減りましたわ」
『・・・まだ食うのか？』
「食べ損ねたのですよ。・・・あの肉食どもの所為で」
『・・・』

レイシアも溜息を吐き、フレルルと一緒に厨房へと姿を消した。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8826y/

浸透世界のデリット

2012年1月6日23時45分発行